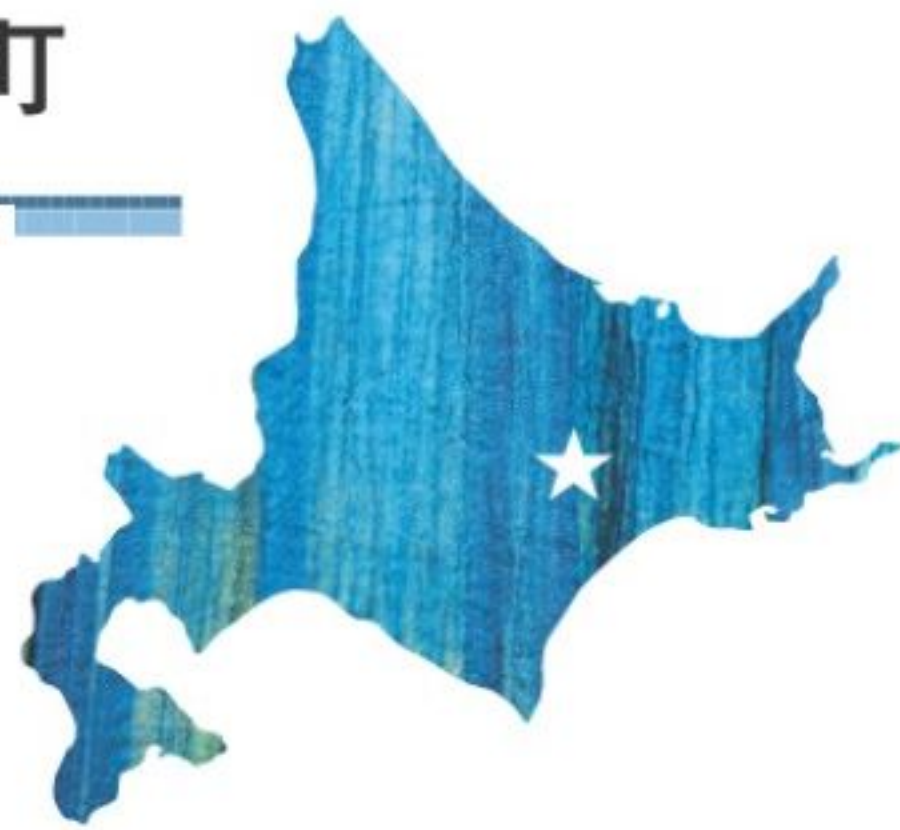


亀田 悦子さん 海陽町 → 北海道本別町



83歳 北の大地で挑む

に、藍を植えたらどんなにたくましく育つだろう」。好奇心に突き動かされ、80歳の春に移住した。

移

り住んだ本別町 営住宅には、小さな畑と藍がめを置くスペースがあった。翌年、持ち込んだ藍の種を育てると、少量ながら期待に込めてぐんぐん育ち、秋には採種できた。

藍

ちゃん、大きくなってくれたね」。6月中旬、北海道東部に位置する本別町の藍畑で海陽町から移住した亀田悦子さん(83)が苗に語り掛けた。ビニールハウスなどで15、20坪に育った藍の苗を定植して約2週間。「厳しい環境のためかたくましい。必死に生きようとしている」。確かな手応えに笑みがこぼれる。

2020年3月に移住する前年、知人に会うため訪れた本別町で、道端のタンポポに目を見張った。花や葉はこれまでに見たことがない大きさ。茎は太く、土を握ると深く根を張っている。北の厳しい自然環境に適応したからだと感じた。肌着メーカー・トータス(海陽町)専務の亀田さんは、体にも環境にも優しい藍染製品を求めて「海部藍」を開発し、藍の研究に情熱を注いできた。「エネルギーあふれる北の大地

22年は約5坪の畑を借りて本格的な藍栽培に着手。町の新たな特産「本別藍」を目指す亀田さんに共感した地元の仲間数人と共に、農薬や除草剤を一切使わずに丹精込めて育てた。だが、寒暖差の激しい本別町の自然環境は厳しかった。ある朝、畑の様子を見に行くと霜が降りて葉が黒っぽく変色していた。順調に育っていた藍が一夜にして全滅した。

落胆は大きかったものの、本別町に藍を根付かせたい思いは少しも揺るがない。今季は畑を約10坪に拡張し、定植の時期を1カ月ほど早めた。「今年の藍は茎が太く、葉も大きい」。藍は亀田さんに見守られながら順調に育ち、間もなく

仲間と共に苗栽培 藍液の研究に没頭

「本別藍」特産化 夢見

収穫の時期を迎える。亀田さんが藍染の魅力に引き込まれたのは20年ほど前。アトピーに悩むトータスの顧客から相談を受けて調べるうちに、徳島特産の藍が古くから薬草として用いられてきたことを知った。

ただ、薬を使った伝統技法による藍染は高価で、量産に向かない。そこで、経済産業省などの支援を受け、乾燥させた藍の葉を粉末化して染料にする新技術を開発。抗菌、消臭などの効果がある藍染の肌着を比較的手頃な値段で提供できるようにした。「家庭料理はそれぞれの家庭ごとに味が違って当たり前でしょ。藍も、いろんな形があってもいいんじゃないでしょうか」

田さんは昨年4月、町営住宅から屋内に藍がめを置ける一戸建てに移った。藍がめのある部屋を「実験室」と呼び、理想の藍液を求めて研究に余念がない。今の目標は、本別町の木・カシワの灰汁を使った藍液を作ること。伝統技法の「灰汁発酵建て」に欠かさない灰汁は一般にカシワなどの堅い木を用いるが、青森県では名産のリンゴの木を使った灰汁で藍液を作った例があるという。「カシワは本別町のシンボル。本別町で育てた藍とカシワの灰汁で藍染ができれば、こんなにすてきなことはない」。(山口和也)

亀

田さんは昨年4月、町営住宅から屋内に藍がめ

本別町 十勝平野の東北部に位置し、豆類や小麦などの栽培が盛ん。徳島とゆかりが深く、明治期に当時の立江村(現小松島市)など県南から200戸余りが本別町勇足地区に入植した。県人開拓団は原始林を切り開き、十勝でも屈指の畑作地帯に発展する礎を築いた。勇足小(本別町)と立江小(小松島市)は1991年から交流を続けており、2001年には小松島市と友好都市提携を結んだ。



自宅の「実験室」で理想の藍液を求めて研究を重ねる亀田さん(北海道本別町)



新たな藍の可能性を求めて海陽町から北海道に移住した亀田さん(左から3人目)。自然環境の厳しい北の大地で藍を根付かせようと奮闘している(6月、北海道本別町)